

「出す」とらららら

小倉 定枝

私はこの夏、謎の湿疹に苦しめられた。私が勤めていた幼稚園は、日頃は忙しいが、夏だけはゆつくりと休みが頂けるので、これ幸いとばかりに怠惰な生活を送っていた矢先の出来事であった。ある日突然頭皮に湿疹らしきものができ、そのうちにそれがだんだん頭全体に広がって、痒くて夜も眠れなくなってしまうた。医者に行つて薬

をもらつても、一時的には治るがまたひどくなつて出てくる一方である。そのうちに、その湿疹が顔にも出始めて、いよいよ恐ろしくなつてきた。何が恐ろしいと言えば、原因がわからないのが恐ろしい。もしかしたら、恐ろしい病に感染してしまつたかもしれないと本当に心配になつたのである。しかし、どうやら恐ろしい病ではないらしい

ので、私は予てから信奉していた自然医学的な治療を行うことにした。

以前から信頼している先生の説によると、過食で胃腸の粘膜に微細な傷ができ、その傷を通過して腸内の「何物」かが体内に侵入したため、体内でアレルギー反応が起こったということらしい。少食を続けて体内に溜まったものを出し、胃腸を休めて微細な傷を治すという身体の内側からの治療、および体質改善が有効であるとのこと。あわよくば、てっとり早い治療を……と望んでいた私も、観念してこの少食を徹底することにした。しばらくすると、また湿疹が悪化して見るも無惨な姿になってきた。しかし、胃腸の傷が治つてくると、今度は体内の毒素が排泄され始めるため一時的に悪化するのはやむを得ない、むしろ毒が出ているのだから喜ぶべきことであるらしい。いつも通っている鍼灸師の先生も「出すものは出さない

と。まあしばらくかかるでしょう」とつれない。それでも、体内にこんなに毒素が溜まっていたのかあと感心する思いで、毒素を出し切ることに専念した夏休みだった。

湿疹に苦しみながらも、「出す」ということについて日頃の保育に共通するものがあるような気がして仕方がなかった。三歳児を担任していた時のこと、五月を過ぎた頃から「先生なんか大嫌い」と、よくAくんに言われた。おままごとをしていて、「わあ、おいしそう。いただきます」と子どもたちの作ってくれたごちそうを食べようとしていると、「先生にはあげないよ。先生だけにはあげない」とも言われた。お片づけをしてくれたことを「ありがとう、Aくん、助かったわ」とほめると「先生なんか優しくくないよ」の返事。Aくんが担任の私に気持ちを向けて欲しいという思いでいるということが、私が他の子どもを抱い

ているとわざわざやってきて、その人に「お膝に乗らないで！」と怒ったりしていることなどからも伝わってきた。Aくんの気持ちに応えたいと思いなながらも、いざ「先生だけは嫌い」とか「先生が転んで良かったね。ヤッター」なんて言われると、人間が未熟なので、時にはムツとしてしまい、「先生だってそんなことばかり言われたら、Aくんのこと嫌いになっちゃうかもしれないよ」などと言いつ返してしまったりして、後から反省するのであった。

それでも、二学期にはおままごとコーナーの隅っこで始めた、動物園ごっこのお客さんにずいぶん長い間あった。Aくんが箱に一人で入り、牛になって「モー、モー」と鳴いたりするのを見ては、「牛に餌をあげよう」と他の人を誘って餌をあげにいったり、みんなで動物園の看板を書いて「何の動物がいるんだろう」と見にいったりし

た。「今日は、タイガーだよ」「今日はワニだよ」とタイガーやワニになりきっているAくんを心底から可愛いと思った。

十月になって、今まで私が描いていたウルトラマンのお面をSちゃんとRちゃんが自分で作り始めたことからお面作りが流行り、Aくんもウルトラマンのお面を自分で作れることが嬉しい様子だった。何度も描き直しては、自分が納得するものを作っていた。十月下旬のある日、「先生ウルトラマンエースになって！ Aくんはゾフィーね！」と言う。外に出てエースとゾフィーが羽を



開いて飛んだ。エースが怪獣に捕まって「ゾフィー兄さん助けてー」と叫ぶとゾフィーが助けに来てくれた。

十一月の朝、「Aくんおはよう」と挨拶をする
と、「先生、先生はちよつとだけ遊んであげる、ちよつとだけだよ」と言う。「ちよつとだけでも嬉しいわー」。その翌々日には、「先生、先生のこ
とこれくらい好きだよ」と親指と人差し指をほん
のすこし開いた。これには嬉しい、嬉しいと
オーバーに喜んだ。なにしろ、毎日、「嫌い」と
言われていたので本当に嬉しかった。その次の日
から、「今日はこの位」と親指と人差し指の距離
が少しずつ伸びていった。

三学期にはお弁当を隣で食べようとすると、
「駄目だよ！ここで食べちゃ駄目！」と言われ
たが、「いいじゃない、一緒に食べようよ。先生
は一緒に食べたいの」と言うと「ま、いっか」の

返事。Yちゃんに「先生のこと好きなんでしょ？」と聞かれて、小さく頷いていた。今まで駄目だったことが許せるようになってきたのかな？と成長を感じて感慨深いものがあつた。

さて、話はまた湿疹に戻るが、湿疹が出てきた時は「何が出てきたのか」とこれまでにない状況に驚いて、どうにかして早く湿疹を止めたいと思つた。湿疹だらけの顔で友人や親戚に会うと、「薬を塗ればすぐに治るから、塗った方がいい」とも勧められた。どうやら、何か想像もしていない不愉快な現象が現れるとすぐになんとか止めたいと思うのが、人の常らしい。しかし、薬ですぐに止めたところで、表面的には良くなつても、結局、身体の内側に問題があるので、後々になつてもっと大変な事態に陥るといふことが予測される。冒頭に挙げた先生の著作を読んでいて、

「最近の世情は、入れる」ことが無闇に強調され（中略）、「出す」方は軽視されがちであります」とあった。確かに、何にしても「入れる」ということには熱心だが、「出す」ということは社会にあつてあまり重視されていないようだ。

保育にあつても、大人からするとやっかひとも不可解とも思えることが子どもから「出る」と、なんとかしてやめさせたいと無意識に思つてしまふことが多いだろう。とはいえ、湿疹に薬を塗つて一時的に治すのと同じように、叱つたり、「出せない」雰囲気を作つて一時的にやめさせても問題は解決しない。また、「出て」いるのだからとそのまま放つておくことが望ましいとも思えない。

保育者として三歳児の担任を持つて初めての年に、片っ端からおもちやをひっくり返して歩く人がいた。私は、「気持ちをおもちやをわかつていれば大丈夫」

と思つて、特に何ら伝えることもなく、後からぐちゃぐちゃになつたおもちやを整理してまわつていた。しかし、その人の気持ちはガサガサと荒れていく一方で、私の気持ちが伝わっているとは到底思えない状況だった。後に、「気持ちをわかつていふ」というつもりでいながら、その人の気持ちに正面から向き合うのを避けていただけではなかつたのだろうかと大いに反省させられた年だった。

先のAくんとの関わりでは、時には叱ることもあつたし、怒ることもあつたが、関係を作ろうと一生懸命だった。私の保育の何かが違うのだろうかと思つたり、焦つたりしながらも、何とか気持ちがAくんが届くことを祈りつつ毎日を過ごした。そうしながらも、ひたすらあきらめずに待た。だからこそ、気持ちを素直に表現してくれた時は嬉しかった。懸命に関わりながらも、待つと

いうことの大切さを教えてもらったように思う。

今年は、初めて四歳児の担任になった。四月、少し緊張気味だった子どもたちも五、六月になるとだんだんと自分を「出す」ようになってきた。

みんなが集まって話を聞くとときに羽目を外して踊ってみたり、押されたと言って大声で泣いたり、何か気に入らない事があるからと、靴箱の隅ですねてじっとしていたり、ここが痛いあそこが痛い、と傷とは言えないような傷をさして言いに来たり……人によってそれぞれ出し方は違うが、その人なりに今必要だから「出して」いるのだと思う。クラスはいつもワイワイと賑やかである。賑やかすぎて「本当にこれでいいのかしら？」と焦ることもあるが、それぞれの思い思いの表現が一つにまとまった時、何とも言えない一体感を感じることがある。

この原稿が掲載される一月には、私の湿疹は跡形もなく消えているのだろうか。そして、クラスの子どもたちは一体どういう姿で毎日を送っているのだろうか、少しは落ち着いているのだろうか??……とても楽しみである。

経験が浅く、未熟な私であるが、子どもたちが様々な形で自分を「出して」くれることに感謝しつつ、これからも子どもたちがありのままにその時々自分を「出せる」ような保育者でいたいと思う。

(洗足学園大学附属幼稚園)

参考・引用文献

甲田光雄「アレルギー性疾患の克服」創元社一九八六年